

Case Study

地域医療のカタチ 長崎県

長崎県“独自”の研修と

優れた指導医との出会いで

目指すキャリアを実現する

新・鳴滝塾の実力！

2 010年に発足し16年目となった、“オール長崎”で若手医師を育てるプロジェクト【新・鳴滝塾】。県内15の臨床研修病院が連携した多彩な研修システムや、島の数が日本一多い県の特徴を生かした豊かな研修フィールド、開放的で人情味溢れる風土など、「長崎県だからこそ経験できる」「長崎県だからこそ実現できる」といった独自性の高い研修環境を求めて、毎年、全国のさまざまな大学の出身者が長崎県に集まってくる。

今回は、長崎県で研修医や若手医師の教育に尽力してきた長崎大学病院医療教育開発センターの教授であり、【新・鳴滝塾】の塾長を務める浜田久之氏、長崎県の離島・へき地医療を支える「地域枠」学生や医師のキャリア支援を行う長崎大学病院地域医療支援センターの教授である大坪竜太氏、そして長崎大学病院の研修医、緑川一清氏にお話を伺い、長崎県の医療と初期研修の“独自の強み”に迫った。

ながさき地域医療

人材支援センター センター長

長崎大学病院 地域医療支援センター 教授

長崎大学病院 外科学講座 乳腺・内分泌外科

大坪 竜太 Ryota Otsubo

出身地：長崎県

出身大学：自治医科大学
(2000年卒)

長崎大学病院
研修医 2年目

緑川 一清 Issei Midorikawa

出身地：東京都

出身大学：福島県立医科大学
(2024年卒)

新・鳴滝塾 塾長

(長崎県医師臨床研修協議会)

長崎大学病院

医療教育開発センター 教授

浜田 久之 Hisayuki Hamada

出身地：長崎県

出身大学：大分医科大学
(1995年卒)

大坪：長崎県は全国で最も多くの島を有し、離島医療のフィールドも非常に多彩です。島ごとに医療体制の違いがありますし、離島やへき地では、予防医学から地域包括ケア、行政と連携し

一人一人のニーズに応える多彩な研修メニューを用意

編集部：16年目となった「新・鳴滝塾」の強みとは何でしょうか。

浜田：長崎県内15の臨床研修病院は、組織の垣根を越えた横断的な連携によって、「長崎県」という大きなフィールドを活用できることが強みです。多彩な研修プログラムと15病院を行き来できる柔軟なシステムによって、一人一人のニーズに応えることができます。緑川先生はこれまで何カ所の病院を経験したの？

緑川：6カ所で研修しましたが、1日だけの「外来研修」も含めると10カ所以上の施設を経験しています。

一人一人のニーズに応える多彩な研修メニューを用意

編集部：16年目となった「新・鳴滝塾」の強みとは何でしょうか。

浜田：長崎県内15の臨床研修病院は、組織の垣根を越えた横断的な連携によって、「長崎県」という大きなフィールドを活用できることが強みです。多彩な研修プログラムと15病院を行き来できる柔軟なシステムによって、一人一人のニーズに応えることができます。緑川先生はこれまで何カ所の病院を経験したの？



新・鳴滝塾とは？

2010年に発足した、長崎県と県内15の臨床研修病院が連携し、若手医師を育てるプロジェクト。日本で初めて西洋医学を教授したシーボルトの私塾・鳴滝塾の名を受け継ぎ、【新・鳴滝塾】と命名した。



about NAGASAKI

長崎県の総面積の約4割を島が占め、有人島の数は全国最多の51島にのぼる。県内には、2つの世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」と「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」があり、特に「端島(通称・軍艦島)」や「大浦天主堂」「海外の出津・大野集落」などが有名。さらに、日本遺産第1号に認定された「国境の島 壱岐・対馬・五島」を擁し、長崎市は世界的に評価される夜景スポットとしても知られている。美しい自然や豊かな観光資源、そして海山の豊富な食に恵まれた魅力溢れる県。



た多職種チーム医療も経験できることが大きな強みです。

緑川：五島列島の福江島にある長崎県富江病院や、平戸島の平戸市民病院でそれぞれ1〜カ月間の研修を行いました。島ごとに医療体制の違いがあり、ある島では緊急疾患が発生すると、ドクターヘリや船で本土に搬送する必要があります。一方、福江島には高度医療を提供できる五島中央病院があり、2・5次までは島内で対応できるなど、島ごとに決められた搬送フローがあることを学びました。

大坪：離島医療では、島内ですべてまで医療が完結できるのかを考慮しながら診療を進める必要があります。それは成長できる機会になりますし、大都市では経験できない地域包括ケアを学んで、将来の日本に求められている医療を実感できるでしょう。

緑川：平戸島の平戸市民病院では、全国各地から地域医療研修を受け入れています。私が研修に行った時は神戸と横浜から研修医の先生が来ていました。県外出身の自分が、休日に長崎市内や佐世保を案内したり(笑)。案内しながら、自分もすっきり長崎の人間になれたんだなど、うれしく感じました。



大坪：長崎大学病院の地域医療研修では、離島、へき地、市中病院、医師一人の診療所、在宅中心の開業医と44カ所もの多彩な選択肢があり、バラエティーに富んでいます。研修医が目指す医師像によって、また、幅広い経験を積みたい、もしくはじっくり深く学びたいという希望に応じて研修先が選べるよう多様な選択肢を用意しています。

浜田：一人一人の能力やニーズに合わせて、プライマリ・ケア能力を確実に身に付けることができますよね。

大坪：はい。例えば人口2000人ほどの小値賀島にある小値賀診療所は、研修医が初めて離島医療を経験するのに理想的な環境です。有床診療所のため、さまざまな症例が集まり、入院治

Interview「ドクターズマガジン編集部」Text「田口素行」Photograph「松村琢磨」

療や看取りも経験できます。じっくりと患者さんに向き合える点も魅力的です。

私が小値賀診療所に診療支援に行った際、県外から来ていた研修医と一緒に婦人科疾患で出血のある患者さんを診ました。本土搬送の必要がありました。天候悪化でドクターヘリが出動できず、高速艇で搬送しました。研修医は「忘れられない特別な経験ができた」と話していましたね。

浜田：長崎県には、そうした特別な経験ができるフィールドが数多くある。都市部、離島、へき地医療と、日本の縮図ともいえる環境で幅広く経験できることが特徴です。初期研修は、医師としてのキャリアを形作る重要な時期。長崎県での貴重な経験は、その後の医師人生における礎になるはずです。

受け継がれる“熱い教育マインド” 優れた指導医がいることも強み

編集部：「新・鳴滝塾」では、指導医の育成にも注力されています。

浜田：医師教育には充実した研修フィールドがあるだけではなく、長崎県には多数の優れた指導医がいることも強みです。2010年に発足し

新・鳴滝塾 5つのポイント

POINT 1 長崎県の研修病院への見学・研修・マッチング受験・就職を応援!

見学を希望する全国の医学生や研修医に対して、病院見学のコーディネーターや旅費をサポート。

POINT 2 長崎県の研修病院をアピール

県内全ての研修病院(15病院)が一堂に会し、合同説明会を開催(県外でも開催あり)。

POINT 3 指導医の育成

優秀な指導医を育てるため、指導医講習会を年2回開催する。

POINT 4 充実した研修をサポート!

オール長崎で新人オリエンテーションを開催。

POINT 5 学びの機会を提供

医学生や研修医、指導医などを対象とした学びの機会(教育講演会など)を提供。



Case Study

地域医療のカタチ 長崎県

以降、「新・鳴滝塾」で指導医講習会などを通して高い教育能力を有した指導医の育成にも取り組んでいます。かつて長崎で研修を行った医師たちが今では指導医として教育に携わり、現場にはとても活気がある。指導医講習会には研修医もサポート役として参加し、将来指導医を目指す意識も高まります。

大坪：【新・鳴滝塾】の発足から16年という年月の中で、通称「浜チル」（浜田チルドレン）と呼ばれる優秀な若い指導医が次々と育っています。医師教育の好循環がしっかりと根付いていますよね。

浜田：「浜チル」(笑)の源流は、約170年前にさかのぼります。オランダ人医師ポンペが長崎に來日して近代西洋医学を伝えたことから始まります。長崎県には時代を超えて各年代の人々が受け継いできた、熱い教育マインドが息づいているんです。

大坪：長崎県は歴史的に外国との交流拠点であったため、外から来る人を受け入れる風土があります。

緑川：病院見学の際も皆さんから温かく歓迎してもらえます。僕は東京都出身ですが、研修医

1年目の時点で「長崎県出身だと思っていた」と何度も言われるほど、すぐになじむことができましたね(笑)。

大坪：私は自治医大出身としてへき地勤務の義務を果たし、医師11年目にして長崎大学の腫瘍外科に入局しました。当初は大病院に、「白い巨塔」のイメージがあつて不安でしたが、全くの杞憂でした。そこから医局長を務め、オランダのライデン大学への留学も実現しました。長崎

県は外部から来る人を分け隔てなく受け入れる文化があり、誰もが活躍できる土壌があります。

浜田：もちろん、学閥もありません。私も長崎大学出身でないにもかかわらず、長崎大学の副学長を務めています。「白い巨塔」ではなく、良い意味のホワイトな組織ですよ(笑)。

編集部：緑川先生は県外出身ですが、なぜ長崎大学病院を研修先に選んだのですか。

緑川：感染症に興味があり、母校である福島県立医科大学の先生から、「感染症を学ぶなら長崎がいい」と勧められたからです。

浜田：長崎大学病院には【初期

研修医・感染症特化コース】がありますし、2021年に【感染症医療人育成センター】を開設し、研究や教育支援も行っています。

【総合感染症科・国際感染症予防診療センター】(熱研内科)では国際交流も盛んで、新たにケアで熱帯病などを学べる初期研修プログラムも始まりました。

緑川：初期研修からケアに行けるなんて、とてもうらやましいです。

大坪：【原爆後障害医療研究所】も長崎大学ならではの存在です。

放射線被曝、甲状腺や人類遺伝学に関する研究が有名ですが、カザフスタンからの医師受け入れや、最近ではウクライナの甲状腺外科医が来日し、一緒に手術に参加するなど、国際的な連携が強いことも特徴です。

編集部：長崎県では独自の新しい取り組みが次々と展開されている印象があります。



浜田：「教育はこうあるべき」という固定観念ではなく、時代やニーズの変化に応じて柔軟に変化、進化させていくことが重要です。新たな試みは継続的に続けていきます。最近感じるのは、研修医にとってプライマリ・ケア能力の習得は不可欠ですが、近年の初期研修は、ゆとり・傾向が強いので、3年目からの専門性をしっかりと見越した研修システムの構築も必要だと思っています。

大坪：離島では2・5次まで対応できる高いスキルが求められる。それを見据えた研修こそが住民の命を守る力になります。長崎県では、「離島医療の経験」のみではなく、離島にいても、内科、外科、小児科、産婦人科、整形外科、救急、総合診療と7つの診療科で専門医資格を取得でき



新・初期研修プログラム【NIコース】を開設！

NIコース：(Nagasaki Integrated Residency Course: 長崎型統合研修コース)とは、長崎大学病院で2025年7月に導入された新しい「橋渡し型」の研修プログラム。将来希望する診療科での専門研修を見据え、初期研修と専門研修をスムーズにつなぐ仕組みを整備。早期から希望診療科での臨床経験や指導体制を確保することで、将来の専門医取得を目指した継続的・計画的なキャリア形成を支援します。





るなど、キャリアアップできるシステムを整えています。

浜田：医師は技術職です。プライマリ・ケアや全人的医療は重要ですが、人は良いけど、技術が伴わなければ人命を救うことはできません。

緑川：私の場合、患者説明や、島で急変した患者さんへの初期対応など、責任を持つ機会を与えてもらい、その重みを実感する経験を積みました。その結果、医師としての態度・技能・知識を備える意識が高まり、専門研修への円滑な移行につながったと思います。早くから責任を持つ経験は重要だと思います。

大坪：初期研修と専門研修との間にあるギャップに苦しむ先生も少なくありません。その差を



埋める取り組みは非常に重要ですよ。

編集部：そうしたギャップを埋めるための取り組みとして何をされているのでしょうか。

浜田：長崎大学病院では2025年7月から新たな研修プログラム「Nコース」を立ち上げました。将来の診療科を決めている先生は、早期からその診療科の臨床経験が積めます。目標に合わせた濃密な研修で専門研修へのスムーズな移行をサポートしています。

大坪：離島でも3年目から外来を担当します。その準備のため、研修医は指導医と共に【外来研修】を行います。自分の目指す診療科や医師像を実現するために、そうした長崎の優れた研修システムをどう活用すればいいのかを考えることも大切。「どれだけ成長できるか」「目指すキャリア

を実現できるか」は、最終的に研修医一人一人の姿勢が大事ですし、そこに引き上げてくれる指導医との出会いも重要です。

浜田：最も良い研修は何かと聞かれたら、「あなたの未知の能力を引き出してくれる指導医と出会うこと」だと答えています。

研修医の姿勢やビジョンが、そうした指導医を自分に引き寄せると思っています。

大坪：長崎県は優れた指導医が多いですから、能力を引き上げてくれる指導医に巡り合う確率が高いのも魅力です。

長崎県の優れた研修環境で日本の医療をけん引する医師に

編集部：長崎県では、3年目の進路に迷っている方にも最適な研修環境を提供できますか。

浜田：多彩な研修メニューを用意しているので、興味ある分野を見つけやすく、自分に最適なキャリアが見極められる環境だと思います。

大坪：長崎大学の内科では2015年に【内科専門医育成所】(通称「内科ハブセンター」)を開設しました。ここでは、内科に興味があるものの専門性を絞り切れない先生も、総合的な内科トレーニングを積みながら将来進みたい専門分野を見極める

ことができます。さらに、外科では2025年に腫瘍外科と移植・消化器外科と心臓血管外科が統合し外科学講座と外科ハブセンターを開設。幅広い外科領域が経験できるため、自分の興味ある専門分野を見つけやすくなりました。

緑川：私は感染症の道に進む予定ですが、臨床医として働くか、行政官として働くかで迷っています。長崎大学は母校である福島県立医科大学と共同大学院(災害・被ばく医療科学共同専攻)を通じて交流があるため、将来は母校に帰る選択肢も考えています。その場合でも、長崎大学は快く送り出してくれる大らかさがありますよ。

大坪：県外に出ても、長崎県の離島の美しい景色や風土、人々の温かさ、を思い出し、「また戻りたい!」と感じるのも長崎県の魅力。もちろん、戻る際には各医局や【地域医療支援センター】がしっかりサポートします。

浜田：長崎県で研修を受けた先生方には、日本の医療をけん引する存在になってほしいですね。それを実現できる研修システムと充実した研修フィールド、そして優れた指導医が長崎県にはそろっている。自信を持って、長崎での研修をお勧めします。

INFORMATION
長崎県
医師臨床研修協議会
【新・鳴滝塾】事務局

新・鳴滝塾
検索

キャリアプランの立て方は?

島での仕事、生活は?

妊娠、出産、子育てのこと...

あじさいプロジェクト
NAGASAKI AJISAI PROJECT

ワーク・ライフ・バランスに優れた「働きやすさ」も長崎県の魅力!

2012年から県内全域を対象に、医師が仕事と生活(子育て・介護など)を両立できるよう支援し、その環境を整備する【あじさいプロジェクト】に取り組んでいる。2012年に長崎大学病院内に開設した【メディカル・ワークライフバランスセンター】が中心となり、医師会や関係機関と連携してプロジェクトを推進。長崎県の医師・医療人のワーク・ライフ・バランスへの取り組みは全国的にも早くから注目されており、「働きやすさ」は長崎県の大きな魅力。

DOCTOR'S MAGAZINE

ドクターのヒューマンドキュメント誌

4

2026

No.315 Apr.

ドクターの
肖像
#311

慶應義塾大学 医学部 消化器内科 教授
金井 隆典

医療UPDATE! [特別対談]

医療DXで変わる現場、変える未来

～ 実践と研究のクロスポイント ～

神野 正隆 × 木下 翔太郎

Case Study [特別企画]

地域医療のカタチ「長崎県」